

自信と職業観を育成する 進路多様校での体験型学習

希望者のみ参加、全員参加、短期、長期と、さまざまな形で行われている職業に関する体験型学習。特に進路多様校においては、体験学習をどのように実施し、どのような効果を上げているのでしょうか。先生方の実感と生徒たちの気づきを交えてご紹介します。

取材・文／永井ミカ

視野を広げ、自己有用感が持てる体験学習に

職業観育成教育では、まず現実の問題として「働かなくてはならないこと」をしっかりと伝え、「ではどうやって働くか」を問いかけます。生徒の視点に立ち、生徒の現実を知り、何が必要なのか考えていきたいものです。

得意なこと、苦手なことを知ろう

アルバイト経験がある生徒もいますが、狭い視野で「働くってこういうこと」「マニュアル通りにやっていたら大丈夫」などと考えて、大人になったつもりでいることがあります。学校が実施する職業観育成教育では、さまざまな職場や仕事があることを知ってもらいたいもの。視野を広げていくなかで、生徒が「これならやれるかもしれない」という感覚をもつのは大切な経験です。

次の段階では、興味のある仕事の中身を知ることができる体験を。また、販売員や保育士のような身近な職業だけでなく、日常の生活からは想像もできないような仕事の一端に触れる経験もさせてあげたいものです。

何が苦手で、何に喜びを感じるのか。販売？ 物作り？ 福祉？ ざっくりとした分野でかまわないので、自分の適性を考えさせます。体験を通してその職業の実際を知り、自分には合わないかわかったら、方向転換する勇気も必要です。

指導ポイント

アドバイス1

自己肯定感を得るための体験は少人数で

最初の職場体験は短い期間でも大丈夫。また、体験が難しければ、見学して働いている方の厳しい表情を見るだけでも効果はあります。その代わりに各事業所には少人数でうかがい、地域の大人とのかかわりをきちんともたせたいものです。働く大人に接して認められて自己肯定感を得ることができれば、生徒は先に進むことができます。

アドバイス2

生徒の希望に沿った体験を

次のステップの体験学習は「本当にこの職業に就いてやっていけるか」という視点を取り入れます。職種を非常に迷っている場合や就職希望の高学年の場合は、生徒の希望をなるべく具体的に取り入れた体験先を用意したいものです。

アドバイス3

事前事後指導をしっかりと

体験学習を単なるイベントにしないために、事前事後指導はしっかりと。事前指導ではなぜ体験するのかといった意味を伝えたり、あいさつなどの練習もしておきたいものです。事後学習で一番大切なのはアウトプット。何を学んだのか、どんなことを考えたのかを自分の言葉にする振り返りが大切で、そのことが実際の就職活動で生きてきます。

今号のアドバイザー

学習面や経済面で

課題を抱えた

生徒も多く在籍する

神奈川県立田奈高校。

ここで10年以上にわたり

「支援」を柱とした

学校づくりに

携わってきた先生



田奈高校(神奈川県立)
学習支援グループリーダー
吉田美穂先生

半年、または1年間の職場体験で あきらめずに貫徹する力を育てる

課題

地元産業であるものづくりの継承者を育成したい。
働くロールモデルが不足。高校中退や卒業後の離職も少なくない。

ふせきた 布施北高校（大阪・府立）

10年前、全国の普通科高校として初めてデュアルシステム（以下デュアル）を取り入れた大阪府立布施北高校。昨年度よりデュアル総合学科も誕生し、長期インターンシップの取り組みで効果を上げている。

長年の取り組みの成果で 100以上の事業所が協力

同校のデュアルは、毎週1回同じ職場に通い丸一日職業体験を行う長期インターンシップ。2年生では半年ずつ、3年生では1年間、合計で3カ所の職場を体験する。2004年度から普通科の中で希望者が実施していたが、13年度よりデュアル総合学科が誕生し、1学年80人が必ずデュアル実習を行うことになった。長年の取り組みで地域と学校の間信頼関係が

育まれ、現在では100以上の事業所が協力している。

1年生の5月にハローワークを見学するが、これはデュアルの効果を最大限に引き出すねらいもある。あいさつ、服装といったマナー指導はここで徹底。また職員に「早めに進路を考える」ことの大切さを語り、仕事探しの疑似体験し、さまざまな職業があることを知る。そして、9月には2日間のインターンシップを体験。これらの体験と教室でのキャリア教育をベースに、10月には生徒が実習希望職種を提出。2年生の4月から、原則として1事業所1人でデュアル実習を行う。「同じ職場に長期で通うことにより得られる効果は大きいです」とデュアル総合学科長の湯浅健一先生。「やり通すことで

自信が生まれます。デュアル経験者の離職率は低く、進学する生徒も目的意識をもって主体的に学校選びをしている」。一方で、生徒が体験先とのミスマッチを早々に感じてしまった場合、長期で通うのはつらい。「けれども、ここで頑張らなくて我慢強さを養ってほしい」と言うのは、湯峯郁子校長先生だ。実際、体験先で励まされやっとの思いで乗り切ることもある。「期待を裏切れない」……そんな気持ちをもったとき、生徒は成長するのだそうだ。これまで、デュアルコースを選択した生徒は中退しないし、就職もほぼ100%決まったという実績がある。「保護者や教員以外に心配したり励ましてくれる大人の存在はとても重要です」と湯峯校長先生は言う。

今後の課題は、地元の産業であるもの

づくりの人材を育成すること。後継者不足の問題もあり、地域からの期待は大きい。

デュアル体験発表より（抜粋）実習先：病院

実習先の方とお話をさせてもらっている中で、「実習生だといっても患者さんからすると、その場において職場の方と同じことをしている以上、実習生だからできないとか、実習生だから適当に患者さんと向き合っていたら良いとかは違うんだと、私のちょっとした行動で患者さんの命にかかわることにつながるんだ」ということに気づきました。

わからないことがあれば積極的に聞くようになり、患者さんとも自分から「おはようございます」や「体調どうですか？」など自分から声をかけられるようになり、患者さんも前よりも気軽に話してくれるようになりました。

お茶を飲むのを手伝ったり、トイレの介助をただけなのに「ありがとう」や「いつもこんなことさせてごめん」と言ってくれる毎日が、とてもやりがいのある実習になり大変楽しかったです。

実習はとてもしんどく、嫌になるくらい大変でした。だけど、やりがいや責任感を持つ大切さ、仕事の大変さを学ぶことができました。あきらめようとしていた看護師の夢もあきらめず頑張ろうと思います。実習先の皆様ありがとうございました。

School Data

1978年創立／普通科・デュアル総合学科
生徒数566人（男子231人・女子335人）
進路状況（2013年度実績）
大学3.8%、短大1.5%、専各16.5%、
就職50.4%、その他27.8%

何年生でも可、何回でも可。 地域に出て体験して人とかがわって成長する

課題

視野が狭く、自己有用感が低い生徒がいる。
全員インターンシップをやりたいが、なかなか条件がそろわない。

げんよう 玄洋高校(福岡・県立)

福岡県立玄洋高校は創立32年目の普通科高校。地域と積極的にかかわりながら、生徒の「人間力」を高める教育に力を入れるなど、学校改革に取り組んでいる。

人の役に立ちほめられることが 働く気持ちをも醸成する

同校にはキャリア教育部の中に進路指導課と人材育成課がある。人材育成課が手がけるのは、インターンシップやジョブシャドウイング、ボランティアなど校外での活動にまつわる業務。キャリア教育部長と人材育成課長を兼ねるのが永吉秀樹先生だ。

およそ10年前、永吉先生は学年主任として、視野が狭く学校外のことをほとんど知らない生徒をなんとか校外で活動させたいと小規模のインターンシップを実施し

た。生徒の中の一人がJR九州に行ったのだが、最初は乗り気ではなかったものの、インターンシップを通して著しく成長し、

JR九州に就職。その後社内で次々とキャリアアップしていく姿を見守りながら、職業体験の重要性を痛感してきたという。

そして「昨年度、学校としてのインターンシップ実施にこぎつけた。希望者を募り、およそ10人の生徒が参加。昨年度はさらにジョブシャドウイングも始めた。新聞社、弁護士事務所、テレビ局……インターンシップが難しい職場もジョブシャドウイングなら可能。「警察官志望だった生徒が、弁護士事務所に行き、検察官や弁護士といった職業にも目を向けるようになりました。身近な職業から未知の職業への関心の広がりや、学習意欲の高まり。そういう生徒が少しでも増えてくれれば」と永吉先生は言う。

同校では、希望者を募り原則として1年生でジョブシャドウイング、2年生でインターンシップを実施しているが、例外も認める。今年はそのカ所で体験した生徒もいたという。「誘い合ってほとんど参加するように指導しています」と言うのは2年生担任の今林佑輔先生。「友達の付き添いで渋々行くような生徒が変わります。学習意欲が低く投げやりなタイプの生徒が、敬語を使えるようになるだけでも成長。表情が明るくなる生徒も多いです」。

体験先の開拓には、県から配置されたキャリアコーディネーター松藤浩一さんが尽力。松藤さんが依頼する時は「ありのままの働く姿を見せてほしい」と言ってお願ひする。また、永吉先生もSNSで同窓会に向けて協力を呼びかけるなどしている。

そんななか、永吉先生は、同校が以前から行っていたボランティア活動も職業観育成に役立つと考え、より力を入れるようになった。「異世代の方と一緒に働くことは、コミュニケーション力の向上になります。そして何より、人の役に立つてほめられたという自己有用感の高まりが、働く気持ちにつながると考えています」。

ジョブシャドウイング



今年は20人がジョブシャドウイングに参加。テレビ局での体験も。

ボランティア



災害で壊れた石垣を復興するのを手伝った。「ボランティアも職業観教育の一つ」と永吉先生。

School Data

1982年創立／普通科
生徒数868人(男子499人・女子369人)
進路状況(2013年度実績)
大学27%、短大17%、専各32%、
就職15%、その他9%

自己の進路を探求するため、3年間で20日間以上のインターンシップの機会を提供

課題

地元企業への就職希望が多くミスマッチが起ころ。外の世界を知らず、早くから進路を意識させることが困難。

伊具高校(宮城・県立)

宮城県伊具高校は4系列(農学、機械、情報、福祉)からなる総合学科高校。生徒全員の進路保証をうたい、3年間を見通したキャリア教育を行っている。

違つ分野を経験したり進路を確認するために複数回実施

「目指すのは出口保証ではなく、本人が進路選択の可能性を知り、目標を見つけ、自分で道を切り拓いていけること」と言うのは、進路指導部長の鈴木英晴先生。同校では、多くの生徒が入学当初は漠然と自宅からなるべく近いところでの就職を望んでいる。「狭い地域で交通の便がよくない」ともあり、生徒は外の世界を知りません」と鈴木先生。そんな生徒たちに広い世の中を見せたい、夢をもたせたい、という思いで

2000年に希望者だけで始まったインターンシップは、04年には全員参加となった。

全員参加のインターンシップは2年生の9月に3日間行われる。生徒に希望を募り、学校はなるべく希望に近い体験先に依頼。今年度は98名の生徒に対し51事業所が協力してくれた。「この3日間は視野を広げるための期間」と鈴木先生。「事後の感想で、安易に進路を決めずもつと仕事について調べたいなどの言葉が出てくる」と、よく気づいてくれたなと思います」。

そして、2年生の3月に希望者による第2回目のインターンシップ(3日間)を実施。こちらは、就職のミスマッチ防止や志望の確認などが主な目的だ。再度福祉関係の体験をして覚悟を決めたい生徒、学校選びのアドバイスを直接聞いてみたい生徒など、毎年20〜30人が参加する。これ以外

にもインターンシップの機会を用意しており

(左図参照)、数名程度が参加している。

学校は、上級生の体験談を聞かせたり、保護者にも説明し、なるべく多くの体験ができるよう働きかけている。最近ではインターンシップ先で卒業生が指導してくれるなど、地域でも取り組みは定着してきた。「求人票をしつかり見るなどの効果があ

り、ミスマッチが減っている実感があります」

と、進路指導部の加藤美恵先生は言う。

「一度、働く側に立ってみる、視点を変えろ」という体験はとても大切。働くって大変だなというシンプルな思いが生まれるだけでなく成長です」と鈴木先生。今後多くの体験の機会を用意し、満足度の高い就職や進学に導いていきたい考えだ。

伊具高校のインターンシップ

- 全員インターンシップ(3日間)
2年生の9月に全員参加で実施。
- 希望者インターンシップ(3日間)
2年生の3月。希望者のみが参加。生徒自身が訪問や作文で依頼し、打ち合わせなども行う。
- 土・日、長期休業中のインターンシップ(8日間)
最長連続4日間2回を限度とし、卒業単位に認定される。
- 平日のインターンシップ(6日間)
3年間で6日間、授業日に行うことが認められている。

※その他、学校休業日に実習することも認められている。

生徒の感想(抜粋)

- インターンシップに参加して、自分の目指すものが前よりもしつかりしたものになった気がします。
- 就職と進学で迷っていたけれど、インターンシップで保育士になりたいと思えた。検定や資格など頑張りたい。
- いつも客で行く視線と、店員という視線で、見えるものが全然違った。
- あらためて自分に欠けているところがはっきりわかりました。保育士とは、ただ子どもが好きというだけではなれない職ということを知りました。
- 本当に将来、自分の仕事になったら、この3日間より頑張らないと。大変だろうけど楽しんだらうなと思いました。

School Data

1920年創立 / 総合学科
生徒数310人(男子162人・女子148人)
進路状況(2013年度実績)
大学2.0%、短大1.0%、専各19.8%、
就職77.2%、その他0%